Japanese Association for Religious Studies



ている。驚くべきことではなかろうか。仏教のもつ可能性を日本人に知らせたいという強い思いから、本書は執筆されたに違いない。

## 秋山　学著
## 『ハンガリーのギリシア・カトリック教会
### ――伝承と展望――』

創文社　二〇一〇年八月三一日刊
菊判　xxvi＋七〇二頁　一二〇〇〇円＋税

久松英二

著者、秋山学氏は西洋古典学、地中海学、教父学を専門とする気鋭の研究者で、本書は二〇〇一年に刊行された学位論文『教父と古典解釈――予型論の射程』（創文社）以後に発表されたビザンティン典礼学、教父学、西洋古典学、仏教・神道を比較項とする東方キリスト教との比較宗教学等、広範かつエネルギッシュな研究活動の成果をまとめたものである。全七〇二頁に及ぶ大著であるということに加えて、その内容の精緻さ、重厚さ、幅広さ、知見の深さに圧倒されるばかりである。

本書は、書名「ハンガリーのギリシア・カトリック教会」が端的に示すように、これまで我が国ではまったく知られることのなかったハンガリーにおけるビザンティン典礼に従うカトリック教会の歴史と現況を紹介し、同教会に見られる典礼の神学を異教文献研究への新たな「光源」とし、古典文献学、古代学さらには東洋思想を「予型論」という著者が持ち続けている独特な解釈学的視座から捉えなおしてみる、というまことに大胆かつ壮大な試みを実現させた画期的研究である。まず、目次を



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



紹介したい。

第Ⅰ編　伝承　ハンガリーのギリシア・カトリック教会総説

第1部　教会史と教会法

第1章　伝承と国際性
——ハンガリーのギリシア・カトリック教会

第2章　スロヴァキアの春——『東方教会法典』の規定と現代の「殉教者」たち

第3章　聖バジリオ修道会の形成と展開
——ハンガリーの場合を中心に

第4章　東方カノン法の世界へ
——クラクフからの法比較論的断想

第5章　『東方教会法典』の神学
——「十字架上の聖体」の内的構造

補論1　中欧概観——旅の記録

第2部　典礼と神学

第6章　ビザンティン典礼による聖体祭儀の神学
——聖バジル典礼をテキストに

第7章　「テュピコン」をめぐる神学
——修道院典礼から司教区の典礼へ

第8章　「聖週間」から「光の週」へ
——朝課の構造と「パラクリス」の意義

補論2　欧米文化研究におけるハンガリー語の意義
——語順を中心に

第Ⅱ編　展望　古典古代学に向けて

第3部　文献学・古代学・教父学

第9章　ビザンティン世界における「知」の共同体的構造
——写本伝承活動と宇宙論的典礼を基点に

第10章　マーチャーシュ王とコルヴィナ文庫
——15世紀ハンガリーの栄華

第11章　ヘロドトスの「父性」
——「東方予型論」に向けて

第12章　ヘロドトスの射程——普遍史・他者性・予型論

第13章　モプスエスティアのテオドロスにおける予型論の射程——典礼と聖書解釈の接点

第14章　アレクサンドリアのクレメンスにおける「訓導者」

第15章　アレクサンドリアのクレメンスにおける「覚智者」

第4部　東方予型論

第16章　「即身成仏」と「神化」
——東方キリスト教神学から見た密教思想

第17章　「三密」と「三位一体」——密教とビザンツ神学における「言葉」の位置と意義

第18章　「般若」と「認識」——菩薩行と東方教会神学

第19章　慈雲『南海寄帰内法伝解纜鈔』の現代的意義
——「動詞語根からの古典古代学」に向けて

第20章　慈雲と華厳思想
——「古典古代学基礎論」のために

結章　戒体と聖体——旧約としての仏教



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



この目次を一瞥した者は誰しも本書の書名を再度確認しようとするであろう。確かに前半部の第Ⅰ編「伝承　ハンガリーのギリシア・カトリック教会総説」は書名が示す通りの内容となっていると予想させるが、第Ⅱ編の各章の表題を見れば、第10章に「ハンガリー」という言葉を見出す以外、どの章も本書書名との関連を予想させる表題ではない。この点については確かに議論を要するので、後ほど詳しく扱うことにして、ここでは本書全体の概要を示したい。

まず、本書が扱っている「ギリシア・カトリック教会」というあまり聞き慣れない言葉について押さえておきたい。著者自身も第1章の冒頭部分で、詳しく解説してくれている（一〇―一八頁）。ただ、キリスト教に馴染みのない方々のために、著者の解説を補っておきたい。キリスト教は「西方キリスト教」と「東方キリスト教」に大別されるが、東方キリスト教は、さらにカルケドン派教会と非カルケドン派教会に分かれており、通常「正教」と呼ばれているのはカルケドン派の東方キリスト教であり、「ギリシア正教」または「東方正教会」とも称される。非カルケドン派にはネストリオス派教会と単性論派の諸教会が属し、便宜上「東方諸教会」と呼ばれる。東方正教会はビザンティン典礼を奉じており、ロシア正教会、セルビア正教会など、一カ国ないし一民族に一つの教会組織を具えることが原則となっている。この東方正教会と西方ラテン教会は、教会管轄領をめぐる摩擦、慣行の違い、教皇の首位権主張等が問題となって、たびたび緊張関係に陥ったが、一〇五四年、事実上の東西教会分裂に至った。しかし、西方教会側は合同を積極的に推進する姿勢を見せ、いくつかの教会合同会議が開催された。その結果、東方正教会の一部が、従来のビザンティン典礼と教会慣行を保持したままローマ教皇の権威とカトリック教会の教義をみとめるという形でカトリックと合同した。これを「ギリシア・カトリック」と称する。なお、東方諸教会の中にもカトリックと合同した教会がある。カトリックと合同した東方正教会および東方諸教会を「東方典礼カトリック」と総称することもある。

本書は、一九二〇年以前のオーストリア・ハンガリー二重君主国体制下の旧ハンガリー王国時代から現ハンガリーに至るまでの国内のギリシア・カトリック共同体に焦点を当てている。

本書前半部に相当する第Ⅰ編（第1―8章＋補論1と2）の表題は「伝承」、副題として「ハンガリーのギリシア・カトリック教会総説」が付されている。本編の第1部「教会史と教会法」（第1―5章）では、ハンガリーおよび中・東欧のギリシア・カトリック教会が置かれている歴史的背景・教会法的基礎が解説されている。第1章は第Ⅰ編全体の序章に当たり、ハンガリーにおけるギリシア・カトリックの教会組織の起源・沿革・現況について概説されている。第2章は、もともと旧ハンガリー領に属したこともあり、その文化を継承しているスロヴァキアのギリシア・カトリックの現況について論じている。第3章は、ハンガリーのギリシア・カトリックにおいて知的、教育的側面で大いに貢献した聖バジリオ修道会に関する紹介である。第4章および第5章は一九九〇年教皇ヨハネ・パウロ二世によって発布された東方典礼カトリック教会のための教会法



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



典『東方教会法典』（Codex Canonum Ecclesiarum Orientalium）をめぐる論考である。このうち、第4章は、同教皇によって一九八三年に発布されたローマ典礼教会のための新教会法典（Codex Iuris Canonica）と比較して、両法典の性格・法史的背景・神学的意義を論じている。続く第5章において、『東方教会法典』の主要部分が訳出、紹介されている。著者は、ギリシア・カトリックの特質を「十字架上の聖体論」という言葉で集約しており、この法典も「この十字架上に刻まれるキリストの〈からだ〉を構成する共同体の内的構造と、その外界との接触のあり方を規定した文書」（九頁）として扱ったと述べている。

第Ⅰ編の第2部（第6―8章）は、ハンガリーのギリシア・カトリックにおける典礼文の翻訳および典礼神学に関する研究である。著者は二〇〇四年から二〇〇八年にかけて、同国のギリシア・カトリックに属する教会や修道院においてビザンティン典礼を体験し、その典礼体験に鼓舞されつつ、ビザンティン典礼祈禱文の訳出・分析・考察を試みている。第6章は、「聖バジル典礼」の典礼式次第「リトゥルギコン」（二〇〇六年一月一日用）およびクリュソストモス典礼の司祭黙唱部における聖バジル典礼と異なる部分の翻訳である。この典礼文の解説の中で、著者は、両典礼のアナフォラ部における、司祭が両腕を十字に交差させ聖パンと聖杯の奉献物を捧げる動作にヒントを得て、ギリシア・カトリックの神学の頂点を「十字架上の聖体論」であると主張する。第7章は、ビザンティン典礼を挙行するための式次第書「テュピコン」の翻訳とその解説からなる。第8章は、二〇〇七年と二〇〇八年の二年間にわたって著者が行った復活祭前の受難週間と復活祭後の「光の週」における典礼の録音資料を基に行った論考である。

本書後半部である第Ⅱ編（第9―20章＋結章）の表題は「展望」、副題として「古典古代学に向けて」が付されている。先にも指摘したように、本編は直接的に書名に即した内容とはなっていない。著者は、この部の執筆の背景に、前掲の旧著『教父と古典解釈――予型論の射程』からの経緯があるとして、次のように説明している。すなわち、著者は学生時代からギリシア語・ラテン語の西洋古典文献を文献学・伝承史学的観点から研究してきたが、そこから、理論的神学の確立と共に、異教古典文化を受容してきたギリシア教父たちの貢献に注目し始め、そうした「教父的視座を光源とし、これに基づいて対象となる古典文献を解釈する試み、すなわち『予型論』の試み」（ix頁）の結実が旧著であったという。その後、著者は前掲の「光源」を現代世界に探し求めた結果、ギリシア・カトリックに行き着いたという。それは「ギリシア教父たちの視座を究めるために、その現代における継承者を探そうとした場合」（ix頁）、東西教会分裂（一〇五四年）以降の正教会は、「キリストの体としての教会の一致」という点でギリシア教父と一線を画すが、分裂以前のあり方に回帰しようとする姿勢に貫かれているギリシア・カトリックはギリシア教父たちの継承者としてふさわしく、また実際、この教会の自己認識の一つともなっているからである、と論じている。ようするに、第Ⅱ編で取り上げられる（ギリシア・カトリックとは無縁の）様々な東西文化圏の古典



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



的諸文献を「ギリシア・カトリック」という「光源」からの照らしのもとに解釈を試みているわけである。だからこそ、第Ⅱ編は、ギリシア・カトリックを起点とする「展望」という表題でまとめることができるのである。評者は、本編を内容的に前編で浮き彫りにされた神学に鼓舞された東西比較思想研究として位置づけられると考えており、そういう意味で一貫していると理解しているのだが、後述のように、この点については、問題として指摘したい。

この第Ⅱ編も二部に分かれ、第3部と第4部からなる。第3部は「文献学・古代学・教父学」（第9―15章）という表題の下に、著者は、ダマスコのヨハネ（六七六―七八〇年）の主要作品『知識の泉』の写本伝承の仕方に「復活の生命による古典の賦活化」（三七三頁）が見られると論じ（第9章）、一五世紀ハンガリーの名君マーチャーシュ王の「コルヴィナ文庫」の蔵書蒐集方針に見られる東西教会の神学観や王自身の出自と絡む問題を扱い（第10章）、さらに東方学全体にとっての「父」としてのヘロドトスの意義を問うている（第11および12章）。第13章からは教父学分野の研究に当てられている。著者は、まず四・五世紀の頃のアンティオキア典礼を伝えるモプスエスティアのテオドロス（三五〇―四二八年）の『教理講話』における典礼神学の精神性と歴史的聖書解釈の関係を論じ（第13章）、次いでアレクサンドリアのクレメンス（一五〇―二一五年）の主著『パイダゴーゴス』と『ストロマテイス』の見られるクレメンスの普遍主義的精神のあり方を明らかにしている（第14、第15章）。

第Ⅱ編の第4部は「東方予型論」（第16―20章）という表題の下に、著者は、キリスト教と日本の代表的宗教思想の比較を試みている。まず前半三章（第16―18章）では、キリスト教の思想要素である「神化」「三位一体」「（真理の）認識」に類型的に対応すると著者が判断した仏教側の思想要素、すなわち「即身成仏」「三密」「般若」をそれぞれ対照させて考察している。まず、密教における三密行に励むことで大日如来と一致すると唱えた空海の即身成仏論とギリシア教父、とくに証聖者マクシモス（五八〇―六六二年）の神化思想を比較し、両思想が「宇宙的次元においてその実現をみるという共通性」（五一三頁）をもっている、と著者は述べる（第16章）。そして、ここで言及された「三密」の身、口、意の中の第二の位置にある「口」が陀羅尼を唱える、つまり「言葉」の行であるということと、三位一体の第二位格である「子」が御父の「御言葉」（ロゴス）であるという神学と類似関係にあると説く（第17章）。その次の第18章で、著者は、ギリシア語の gnôsis / epignôsis（覚智・認識）と梵語の prajñā（般若）の語源学的共通性の検証から出発し、六波羅蜜多の最高次に置かれる prajñā とアレクサンドリアのクレメンスにおける神認識の最高次の境位を表す gnôsis の比較および prajñā と『華厳経』における「世俗知」を意味する jñāna「智」との二元性と類比的に対応する東方教会における修道司祭と教区司祭の機能について論じている。第4部後半の二章（第19―20章）は、江戸時代の悉曇学者慈雲尊者飲光（一七一八―一八〇四年）に関する論考である。慈雲に注目したのは、著者によれば西欧に先んじて梵語学の新



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



境地を切り拓いた同人物が「古典古代学」の先駆者だから、とされている。第19章では、義浄（六三五―七一三年）の『南海寄帰内法伝』の最初の注釈書とされる慈雲の『解纜鈔』から西洋古典言語学への展望について論じられ、第20章で、『華厳経』の世界観をもとに神道思想を解き明かそうとして慈雲が打ち立てた雲伝思想を紹介し、それとアレクサンドリアのクレメンスの思想との比較も試みている。

以上、本書の内容について概括的に紹介してきたが、本書を高く評価すべき点として、我が国では全く知られていないギリシア・カトリックの実態が本書によって初めて明らかにされたという事実自体が第一に挙げられなければならない。「合同教会」と聞くと、正教会からは「裏切者」として、カトリックからは「よそ者」としてマイナスのイメージに捉えられがちであるが、本書で論じられるハンガリーのギリシア・カトリックの歴史と現状を知ると、評者自身が抱いていたそうした暗いイメージは見事に払しょくされた。本書を通じて、この教会に、苦難を乗り越えてきたたくましさと生き生きとした信仰生活を実践する姿を見出すことができたことにまず感謝したい。

さらに本書の後半部で展開されている文化・宗教思想の大胆な東西比較の試みも特筆に値する。東方キリスト教が魅力的なのは、まさにその「東方性」にある。それは単に地理的な意味だけではない。漠然とした言い方しかできないが、その発想法ないし物事の捉え方が、我々東洋人の感性に響く性格を有しているからである。だが、その「東方性」を学問的に概念化するのは難しい。しかし、著者の秋山氏は、これに「東方予型論」という氏の独自な方法論を用いて果敢に挑戦しているのである。「東方キリスト教神学から見た密教思想」（第16章）、「密教とビザンツ神学における『言葉』の位置と意義」（第17章）、「菩薩行と東方教会神学」（第18章）という各章に付された何とも刺激的な副題が、それを物語る。さらに、第20章では、ギリシア哲学を福音の「前競技」ないし「前秘儀」として捉えるクレメンスの考え方に「初発心のうちにすでに正しき悟り・完全な覚りがある」とする「華厳思想」との通底性を見出した著者の卓見にも驚かされる。キリスト教、とりわけ東方キリスト教思想への透徹した洞察力はいうまでもなく、こうした複雑広範な仏教思想に対する深い理解（ついでにギリシア語の知識は当然として、サンスクリットの仏教経典やその漢訳本の読解力も加えて）を供えた者にしかなしえない仕事である。

以上のような「東方予型論」としての東西比較研究は、それ自体として興味深いし、ヘシュカズムと東方諸宗教の神秘思想との比較に足を突っ込んだ評者としても大いに鼓舞され、参考になった。しかし、やはりどうしても気になるのは、本書を「ハンガリーのギリシア・カトリック教会」という書名で一括りにしてしまったということである。もちろん、第Ⅰ編のギリシア・カトリックに焦点を当てた議論と第Ⅱ編の「東方予型論」には、内的な一貫性があることは評者自身も指摘したとおりであるが、それは百パーセント納得の上でのことではない。とくに、ギリシア・カトリックが東西教会分裂以前のあり方に回帰しようとする姿勢に貫かれているから、現在の東方正教会よりも「キリストの体としての教会の一致」のなかにいたギリ



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



シア教父の継承者としてふさわしい（ix―x）という著者の指摘は少々ナイーブだという印象が残るし、この「継承者」の議論と「東方予型論」との関連を理解するのはかなり困難を伴う。また、ギリシア・カトリックの解説に当たる前半部から後半部の「東方予型論」への移行について著者は「ギリシア・カトリック教会における『十字架の聖体論』」（xi）を意識しているとし、その神学を端的に示しているものとして、聖体礼儀においてエピクレーシスの直前に司祭が聖パンと聖杯をもつ手を十字に交差させて捧持する仕草を挙げている。これが本当にその神学を反映しているかということはさておき、この仕草が、ハンガリーのギリシア・カトリックに独自のものであるならば、この教会の典礼神学を出発点として、東方予型論へと議論を展開させるという著者のねらいは容易に納得できる。だが、著者自身も紹介しているように、既述の仕草は、聖バジル典礼でも聖クリュソストモス典礼にもその指示が明記されている。ということは、ビザンティン典礼の代表たる両典礼を使用する（ギリシア・カトリックよりも初代ギリシア教父の継承性が薄いと著者が判断する）東方ギリシア正教会においても典礼上の慣例となっているのである。要するに、著者のいう「十字架の聖体論」は、ギリシア・カトリック独自の神学ではなく、ビザンティン典礼を実践する東方典礼教会全体に共通の神学ということになろう。ハンガリーのギリシア・カトリックはその一例に過ぎない。そうであれば、「十字架の聖体論」を基盤とした東方予型論への移行のために東方ギリシア正教会ではなく、ことさらギリシア・カトリックのみから出発させようとする著者の論の展開の仕方はあまり説得的とは言えないだろう。

こうした疑問は残るものの、やはり、関連諸学会における本書が果たした貢献の大きさは断固強調されねばならない。先にも述べたように、ハンガリーのギリシア・カトリックという我が国ではまったく知られていないキリスト教共同体の歴史と現況を紹介してくれたということ自体、大変な貢献である。東方キリスト教、とくに東方ギリシア正教の歴史、神学、霊性に係る著書は、ここ数十年の間に、一般向けのものも含め、我が国でもかなり普及しているし、一九九八年以来、本邦唯一の東方キリスト教専門の学術雑誌『エイコーン』を発行している「東方キリスト教学会」も地道に活動を続けている。著者の秋山氏の論文も、すでに同雑誌の第二号からしばしば登場し、そのほとんどが本書で用いられた初出論文となっている。ところが、「東方（典礼）カトリック教会」と呼ばれる教会共同体の歴史や思想を扱った著書はほとんど存在しない。まして、帰一教会の中でも「ギリシア・カトリック」のハンガリー国内における実態に注目した研究は、本書が初めてである。その意味で、本書は、我が国の東方キリスト教研究の深化と発展に絶大な貢献をなす画期的、記念的な業績と言える。それと同時に、後半部で展開される宗教思想の東西比較研究は、宗教学とりわけ比較宗教学の分野に新たな知見をもたらした。キリスト教思想、とくに教父神学や東方神学に対する著者の鋭い文献学的知見と東洋思想に対する精力的な探究姿勢を供えた著者、秋山氏の活躍は今後ますます注目され、期待されるものと確信している。



NII-Electronic Library Service